

SNS 匿名アカウントの利用動機

1240405 江東嵩斗

指導教員 小谷浩示

研究背景

SNS 利用者属性の研究を進めることは、健全なメディア環境や公的ガバナンスの構築に有用である。特に、現在の SNS 利用の現状を踏まえると、匿名アカウントや仮名アカウントの利用者属性を明らかにする事はオンラインコミュニケーションの質や安全性を向上させる為に重要である。しかし、既存研究は、どのような人々が SNS の匿名アカウントや仮名アカウントを利用しているか、十分に明らかにしていない。

研究目的

本研究は、SNS プラットフォームの設計や運営における匿名性のあり方を再考するための貴重な知見を提供するだけでなく、個人の精神的健康を支援する新たな方策を提案するための基盤となることを目的とする。

研究方法

全国に住む男女 124 人にアンケート調査を実施し、「ソーシャルメディアと匿名性」慶應技術大学大学院制作・メディア研究科を参考に、匿名のアカウントや仮名のアカウントが、利用している SNS アカウントの中にあるかを「1 (はい)」か「2(いいえ)」で回答を求めた。それに加え、個人属性や Cohen. et al. (1983) による Perceived Stress Scale (PSS)を測るための質問 10 項目、舩田等 (2012) による日本語版 UCLA 孤独感尺度 (第 3 版) を測るための質問 20 項目の回答を求めた。それらの内容を基に統計要約やロジスティック回帰分析を行った。

分析結果

仮名性や匿名性がストレス軽減にある程度寄与している可能性が示唆されるとは考え難く、仮名性や匿名性が孤独感に与える影響は限定的であると考えられた。したがって、仮名性や匿名性はストレスの軽減と孤独感に対する効果に一定の影響を及ぼさないことが示唆される。また、匿名アカウントの利用において Gender の限界効果は統計有意 5%で-0.200 であった。この結果から、男性は、女性が匿名アカウントを利用していることに比して 20%も低いことが示された。

考察・結論

ストレスと孤独感が匿名性や仮名性のある SNS アカウントの利用と統計的に有意な関係を持たないことから、個人が感じるストレスや孤独感は SNS アカウントの利用動機に直接的には影響しない可能性が示唆される。これは、SNS の利用が他の要因、例えば情報収集やコミュニケーション手段としての役割がより重要であることを意味する。また、男性と女性の間で匿名アカウントの利用傾向に違いが見られることから、性別に基づく心理的なニーズや動機が存在し、これが匿名アカウントの利用に影響を与えていることがわかる。以上のことから、SNS 匿名アカウントを持つ事はストレスや孤独感等の社会的関係の負の要因によって決まるのではなく、多様な形で繋がりをもちたい人々 (本研究では男性よりも女性) にとって関係性構築の一つのオプションとして機能している可能性が示唆される。